

局の指導、協力を得て、ハエの駆除に種々の方法（DDT oil, BHC粉剤）を試みたが、一向にハエは後を絶たなかった。これは倉庫にある牛皮に幼虫、蛹、成虫が発生しているためであつたので、牛皮業者は、牛皮にBHC粉剤を撒布したが効果は極めて僅少で昨年の秋まで毎年このハエに住民は悩まされて来た。此のハエは調査の結果、チーズバエ(*Piophilidae casei*)で有る事が判つた。そこで吾々は本格的にその被害状態を知るためにアンケートを作り被害状況を調査した。この地区は面積約 20,000 m²、人口1866名、戸数 330戸である。アンケートは 330枚配布、回収は 295枚であつた。以下結果を示すと、1. 被害地区は倉庫より南側で距離は50—250 mの範囲にある。2. 過去6年間に於けるチーズバエの発生は南米の牛皮に少く、北米のものに多い。その数は牛皮枚数に比例して多くなっている。3. このハエの発生は3—12月の間に認められ、7—9月が最も多い。4. 時刻的には日中に最も多く出現して夕方、朝、夜の順である。5. 人家内でのハエの集まる場所は食品保管場所、台所、座敷、ゴミ箱の順である。6. 被害は佃煮製品、酒、魚（特に燻製品）に見られる。家庭では食物保管所が最多で食卓が之に次ぐ。7. よく集まる食物は塩物例へば味噌、正油、生姜等である。8. 駆除法は種々試みたが効果はあつても一日だけで翌日は又倉庫より飛来する。以上から此のハエは輸入牛皮に附着して運ばれるもので、今日までの調査では、土着していないものと思われる。対策としては、輸入先又は船艙内で駆除を行うべきであつて、荷揚げ後は手遅れであると思われる。（日大・医・医動物、東医歯大・医動物、東京都虫疫課）

ゴミタメに集まるショウジウバエ: 岡田豊日 Okada, T.: *Drosophilid flies frequenting garbages*

1. 本邦産ショウジウバエ12属98種の、過去6年間の採集結果をみると、ゴミタメから成虫を採集し得たものは6属25種である。そのうちゴミタメ(G)だけで得られたものは2種のみで、他は何等か別の方法——果物(F), sweeping(S), 樹液(T), キノコ(M), 室内灯火(L),——でも得られている。此等各採集法とGとの組合せて得られた種数と、その採集法で得られた総種数との比(%)をみると、Lの場合が最高率で54%, T 34%, F及びG各31%, M22%となつた。即ち、ゴミタメに集まる種は室内に入る傾向が強く、キノコに集まる種はごく僅かゴミタメに来るにすぎないことを示す。2. ゴミタメに集まる種(G—)と、集まらない種(g—)とが、採集法組合せ数にどんな相違を示すか、平均値を

比較してみると、G— 3.9 ± 0.31 , g— 1.9 ± 0.13 組合せとなり、D/S.E.=6.0で、前者は後者より有意義に大きい。即ち、ゴミタメに集まる種は集まらないものより、棲息環境が雑多で、より広食性を有する。3. ゴミタメに集まる種(G—)と集まらない種(g—)との地理的分布を、国内を北・本・四・九の4ヶ所、国外を北亜・南亜・欧・阿・北米・南米・濠・南洋の8ヶ所に分けて、分布地数の平均値を考えると、国内G— 3.1 ± 0.21 , g— 1.8 ± 0.11 , 国外G— 2.2 ± 0.49 , g— 0.7 ± 0.17 , 国内+国外G— 5.5 ± 0.35 , g— 2.9 ± 0.20 となり、D/S.E. はそれぞれ 3.4, 3.0, 6.4で、何れの場合もG—の方がg—よりも有意義に大きい。即ち、ゴミタメに集まる種は、集まらないものより、国内、国外、国内+国外の何れの場合も、地理的分布が広い。4. ゴミタメに集まる種(G—)集まらない種(g—), 及びキノコに集まる種(M—, 25種)のPI (phallosomal index=aedeagus 長/apodeme 長)は、それぞれ 1.5 ± 0.20 , 1.7 ± 0.13 , 2.0 ± 0.21 となり、統計的には差は充分ではないが、後者ほど大きい傾向は認められた。PIの小さい種ほど primitive と考えられる(既報)から、ゴミタメに集まる種は、集まらない種や特にキノコに集まる種よりも、primitive の傾向がある。

(都立大・生物)

イエバエの生殖能力に及ぼす温度の影響(蠅の増殖機構に関する研究 第4報): 武衛和雄・中島貞夫 Buei, K. & Nakashima, S.: The influence of temperature on the fecundity of house fly, *Musca domestica vicina*, Macq.

蠅の生殖能力には温度が重要な因子として影響する。有効生殖温度の限界は昆虫によつて異なるが、一般に有効発育温度範囲よりもきわめて狭いものである。この研究はイエバエを single pair の状態で飼育し、各種温度(15°C, 20°C, 25°C, 29°C, 33°C, 38°C)下において観察したもので、実験装置や方法は前報に報告した。最低生殖温度限界は15°C(小林)14°C(Feldman-Muhsam)とされているが、著者は15°Cに44日間接触させても産卵は認められなかつた。しかし、のちにこの雌を22°Cに移すと産卵し、その一部は孵化発育した。したがつて生殖温度の低温限界は15°Cあたりであると考えられる。雌の各温度における産卵、増殖は表のとおりである。

pair の状態に飼育したばあいは、crowded conditions に比較して産卵前期間が僅かに長くなり、産卵数も少いように思われる。生殖最適温度は25—29°Cで増殖度は最